

---

# インフィニット・ストラトス～赤竜と白の騎士～reddragonawhiteaknight～

kuxu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS→インフィニット・ストラトス→赤竜と白の騎士→reddragonawhiteaknight

### 【ISBN】

N1028X

### 【作者名】

kuXu

### 【あらすじ】

オリジナル主人公、相田翔。原作主人公、織斑一夏。  
2人の主人公が出会うとき、新たな物語が始まる。

2人の視点で動き出す物語。

完全オリジナルストーリーとなっています。

不定期更新ですが応援お願いいたします。

## 1・1 プロローグ（前書き）

始めまして。

kuxuと申します。

今回初の二次創作作品となります。

暖かく見守ってくれるところです。

## 1・1 プロローグ

これは、中学のころの記憶なのか。

確か、僕はIS学園に来ていたはずなのですが。

僕は何も知らない道で手間取っていた。

この時、僕は先生の手違ひのせいでIS学園に来させられていた。  
僕もISは女性しか使えないことは知っている。

だが、その一緒にきた女子たちが自分勝手な行動のせいで僕一人だけ取り残されました。

そのとき、僕はある開いているドアを見つけてあけた。  
そこには確かにISがあつた。

僕はその時何がしたかったのか、そのISに触つた。  
触つてしまつた。

触つたISがいきなり輝きだした。

まるで僕に何かを伝えようとして。

(な、なんですか。このISは一体僕に何を…?)

僕は手間取つてそこから動けなくなつた。  
まるで眼が熱くなるように感じた。

「こりゃ…君は一体何をしている…!」

その時、大きな声が僕を呼んだ。

それからの僕の記憶は無い。

何をされたのかは僕は知らないが、なぜがその時から僕は転校することになった。

この時から僕の運命が変わった。

IS。

正式名称は【インフェニット・ストラトス】。

宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初は注目されなかつたが、篠ノ之束が引き起こした「白騎士事件」によって従来の兵器を凌駕する圧倒的な性能が世界中に知れ渡ることとなり、宇宙進出よりも飛行パワード・スーツとして軍事転用が始まり、各国の抑止力の要がISに移つていった。

今は宇宙進出は止まっており、今はスポーツとなつて注目されている。

ただ、このISは女しか使えない。

だが、日本にある、アラスカ条約に基づいて日本に設置された、IS操縦者育成用の特殊国立高等学校、IS学園の校門の前にある男が一人いた。

IS学園の学生寮の食堂でここにももう一人の男がいた。  
男の名前は織斑一夏おりむらいちかが朝ごはんを食べていた。

もちろん食べているのは一人ではない。

一夏がいる席の周りにも5人の女子がいる。だが、ただいま何かしら討論中である。

「お前。なぜ邪魔をする……！」

長い黒髪でポニー・テールの髪型をしている少女、條ノ之箒じのののののひくが声を荒げながら言った。

「あなたこそ、この件はわたくしに任せっきりのですわ」

縦ロールのある長い金髪に透き通った碧眼を持つ少女、イギリス代表候補生のセシリア・オルコットは席に座りながらも優雅に言い放つていた。

「セシリア。それはこつちのせつぶよ。あんたたちはおとなしくしてけばいいのよ」

ツインテールの髪に小柄な体格という可愛らしい見た目の少女の鳳ファン・鈴音リンインだが、結構サバサバした性格の少女である。

愛称は鈴。

中国の代表候補生である。

「ほ、僕も話に入れてほしいな」

中性的な顔立ちで、金髪を首の後ろで束ねており、スマートな体型をしている少女、シャルロット・デュノアはあせりながらみんなの話の話題についていっている。

フランスの代表候補生。

一夏はシャルと呼んでいる。

「お前たちに私の嫁は渡さない！…」

長い銀髪で左耳の方には黒い眼帯をしている少女、ラウラ・ボーデヴィットヒは食事だとうのに腕組をしながら言った。  
彼女はドイツの代表候補生である。

「お前ら、やつきから何の話をしているんだ？」

一夏はやつきから彼女たちがなんの話をしているのかまったくわかつていなかつた。

だが、この質問をしても「そっちには関係ない」と言われてしまう。

一夏はただ首を傾げるしかなかつた。

だが、一夏はまったくわかつていなかつたが、実は一週間後に行われるダッグマッチ戦のダレが一夏とタッグを組むか言い争いをしていたのだ。

一夏はタッグマッチ戦のことは知っていたが、この言い争いの意味はわかつていなかつた。

この5人の言い争いはHRが始まるまで続いたそな。ちなみに鈴はクラスが違うので担任に頭をたたかれた。  
鈴はちなみに2組である。

「はー。では話を聞いてください」

1年1組。

これが一夏たちのクラスである。

1組の山田真耶が一番前の黒板の前に立つた。  
ちなみに前の隅にはこのクラスの担任であり、一夏の実の姉である  
織斑千冬が腕組をしながら立っている。

「え、実はこのクラスに転校生が着ました」

『えーーー』

クラスに大きな声が舞い上がる。

このクラスにいるシャルとラウラは元は転校生なのだ。  
こんなにこのクラスに転校生が集まのか。  
さらにはこの学園の転入や転校生は珍しいものなのだ。

「で、では入ってください」

麻耶に言われて、クラスの前のドアから一人の生徒が入ってきた。  
しかし、少しおかしいところがある。

それはその転校生が男子だからだ。

身長は170あるか無いかの大きさで、髪は赤色で左前髪は少し分  
かれており、頭上の髪は少しもボサボサしていくく、彼の真面目さ  
が伝わってくる。

さらには誰もかがわかるほどの赤眼なのだ。

「で、では」挨拶を

麻耶に言われて少年はうなずいた。

「相田翔といいます。これからよろしくお願ひします」

翔は軽くお辞儀をしてきた。

そのとき、いきなり女子たちが騒ぎ始めた。  
まあ、一夏以外全員女子なわけだが。

「また男子よ。男子！！」

「次は赤髪の日本男子！！」

「顔かわいい。女の子みたい！」

女子たちそんなのこと一斉に言つてきた。

「おい……お前ら静かにしろ……」

その刹那。

さつきまで隅っこで腕組をしながら立っていた千冬が一喝を入れてきた。

その言葉とともに一斉に女子たちは騒ぐのをやめた。

「相田。お前は後ろの席だ。前と同じ、男子の世話は織斑。お前が

しろ

「だ、だが千冬姉」

何かを伝えよつとして立った一夏だが、いきなり出席簿で頭を叩かれた。

「織斑先生と言えと何回言つたらわかる……」

「は、はい。織斑先生」

一夏は頭を抱えながら誤つた。

「わかれればいい」といつて千冬は腰に手を当てた。

「相田せりやんとした検査の結果、ちやんとした男子だ」

「へ、そうですか」

以前シャルの男装件があつたのでHIS学園でせりやんとした性別の検査をすることになった。

翔はそいつをまだのせり取つを無面で見ていた。

## 1・1 プロローグ（後書き）

今回、誰もかが考へてゐるだらうと思われるダブル主人公としてこの物語を始めました。

どちらの主人公も応援してくれるとうれしいです。  
感想、お待ちしています。

では、以上kuxuuでした。

翔は千冬に言わされて一番後ろの席に座った。

席に着くまで何人かの生徒の眼が光っていたのはわかつたが、気にしないことにした。

「それでは、生徒も増えたことですし、早速授業を始めましょう」

麻耶が気を取り直して授業を始めた。

はじめは普通の授業だったのだが、数分してから問題は起つた。

（まったくわかりません）

翔は心の中でせつづぶやいた。  
もうすでに汗が出てきている感覚がする。

実は翔の転校は急な話なのだ。

そんな翔にものすごく分厚い本を読めるはずがない。  
実際、決まったのは3日前のことだ。

「はあ」

翔はため息をついた。

だが、そのため息は見られてはいけない人に見られてしまった。

「どうかしたのですか？ 相田君」

麻耶が心配そうに、だが眼の奥はものすごく輝きながら聞いてきた。

「え？ い、いや。 その～」

麻耶が声をかけた瞬間、クラスの全ての生徒が翔のほうを振り向いてしまった。

さらに翔の汗がさらに流れしていく。

「そ、その～ほとんど内容がわからないのですが

翔は何かを決心して麻耶に伝えた。

麻耶と周りの生徒はまた驚いていた。

「あの～ 転校前に渡された冊子が会ったはずですが  
読み終わらせませんでした」

翔は実は読み終わるどころかまったく読んでいなかつた。  
ほかの引越しや、この学園にいくための手続き。  
そのおかげでまる3日間が終わってしまった。

「相田の場合はしょうがない。 だが相田」

「は、はい」

「次の授業は実際に工Uを動かすものだが」

「……」

千冬の言葉に翔は無言になつてうなづいた。  
ちなみにこの会話のとき、周りの生徒はヒソヒソと話をしていた。  
内容はなんかわかる気がする。

そしてこの時間は翔にとつてなにもわからないまま授業が終わった。

落ち込んでいるとき、一夏が翔の席に来て話しかけてきた。

「おい。男子は急いで着替えに行ないと」

「え、あ、はい」

一夏に言われて翔は立ち上がった。

そして急いで教室を出た。

「とりあえず、自己紹介だけな。俺は織斑一夏だ。一夏でいい  
「相田翔です。じゅうたん 翔でいいです」

お互い自己紹介をして着替えるために第3アリーナに向かつて走る。  
どうやら翔は校内の道は覚えているらしい。

そして第3アリーナについた2人は早速T-Sバーストに着替え始めた。  
翔の着替えを見て一夏は話しかけた。

「お前、意外と細いな。なんか、その、ちゃんと食べているか？」  
「え？ええ。食べていますが、僕はどうやら筋肉が付きにくい体质  
らしいので」  
「そうなのか」

一夏は翔の体を見た。

確かに細い代わりにまるで筋肉がほとんど無いように見える。  
しかも肌は見ただけで女性見たいに見える。

「お前、本当に男だよな」  
「はい。そうですが」

一夏の問いに翔はなにかわからない顔で即答した。

「そ、そつか

「それよりも、早く着替えなくつていいいのですか？」

そんな会話をしている間に翔はもうすでに着替えを済ませている。  
翔のTシャツは赤と黒が混ざっている色で、腕まで袖が伸びて  
いて腹の部分は完全に隠れている。

「あ、マジかよ……」

翔の言葉に一夏は驚いた。  
急いで着替えを再開した。  
急がないとあの地獄のお説教がまつている。

翔が声をかけるタイミングがよかつたのかギリギリ時間は間に合つた。  
だが結局一夏は千冬の出席簿アタックを食らつた。  
理由は遅いの一言だった。

「では、皆さん。今日も一日の空中コントロールの実習です」

『はい……』

みんな元気良く返事をした。

だが、翔だけテンションが低かった。

「では、それぞれ専用機持ちを中心にしてそれぞれ操作しろ」

千冬の言葉の後、みんな言われたとおりに集まつた。

翔は一夏の元に来た。

「では、まずは順番ずつ操作しようか」

一夏の言葉にみんなうなづいた。

「うして次々にEISの操作をした。

「どうだ一夏。調子は」

そのとき、一夏の幼馴染でもり、専用機持ちでもある篠が話しかけてきた。

「おう篠。まあまあだな」

「そうか」

「じゃあ次は翔だな」

こんなタイミングに篠が来たのはそれは翔の観察である。  
実は専用機持ちの5人は実は翔が女であるかも知れないとの疑いがあるのだ。

こつじていま篠が監視としてこつちに来たのだ。  
もちろん、自分がやるべきことは忘れてはいけない。

「じゃあ、乗ってくれ」

一夏が言われて翔はEISに乗つた。

翔が乗つているのは日本の専用機の打鉄だ。

だが、乗つたのはいいがまったくEISはビクともしない。

「おこ、心配した？」

一夏が心配して声をかけた。

「あの～。どうやって空中に浮かすのですか？」

翔の言葉に全員にけてしまった。

「お前、ちゃんと動かしたことはあるのか？」

「じ、地面を歩いたことがあるだけですが」

翔はあせつて告げた。

どうやら翔はE-Sの動かし方をまったく知らないようだ。

「イメージするんだ。空中に浮くみたいなイメージを「イメージですか」

翔はそういわれて目を閉じた。

そのとき、打鉄がいきなり浮き出した。

「うわーーー！」

だが、動いたのは「い」がコントロールがつかずでもいいじゃないようだ。  
しばらく空中にいると落ち着いたみたいだ。

「よかったです」

翔は安心の息を吐いた。

そして空の景色をゆっくり眺めた。

「これが、空から見た景色ですか

なんだ心地よい気持ちがした翔だった。

### 1・3 秘密の女会議

翔はいつたん地面に戻つてIRSから降りた。だが、戻つたとき、みんな驚いた顔をしていた。

「あれ? どうかしたのですか?」

翔は麻耶に聞いた。

「あ、あの相田君。今のは?」

「な、なんですか?」

いきなり強く迫ってきて逆に翔が驚いてしまった。

「す、すごいですよ。打鉄であんなスピードを出すなんて」

麻耶は目を輝かせながら言つた。だが、翔はまったく意味わかつていなかつた。

そして、翔は麻耶の輝いた眼を回避した後、千冬に話を聞いた。

「あの、僕はいつたい?」

「相田はどうやら自覚はしていないようだな。実はさつきの打鉄の飛行スピードが今までに無い最高スピードだつたのだ」

「さ、最高スピード」

出した本人も話を聞いてさらに驚いた。これでみんなが驚いた理由もわかつた。

「すごいな翔」

一夏が微笑みながら翔に言つてきた。

「これぐらいの速さが出せるなら専用機はどうなるんだ?」「相田に専用機など無い」

一夏の言葉に千冬が訂正した。

その言葉にさらに全員驚いていた。

「お、俺みたいに翔も専用機もううんじゃないのか?」

そのとた、また一夏に出席簿アタックが炸裂した。

「敬語を使え。しかも、相田が専用機がないのは織斑。お前のせいだと言つてもいいのだぞ」

「お、俺のせい」

「更織」と同じ理由だ

一夏はそのことを思い出した。

以前、更織簪の例があつた。

彼女は日本の代表候補生さらしきかんせいである。

だが、一夏の専用機、【白式】びやくしきの開発で日本の開発者のほとんどがそつちに力を入れてしまつて変わりに簪の専用機の開発ができなくなつたのだ。

翔の専用機も同じ、いや、それ以上のことなのだ。

その理由は翔の本人にある。

翔のI-Sの適正はじきである。

しかも、今の行動。

とても専用機を扱える素質ではない。

一夏の場合は千冬の以前の専用機、【白騎士】のコアがあつたが、  
今回は翔に使うコアもないのだ。

「そうこうことだ。とても相田の専用機を用意できる状態ではない  
のだ」  
「はあ」

翔はなにもへこんではいな様子で返事をした。  
まるでそのことをあらかじめ知っていたみたいに。

この日の授業はすべて終わり、翔は一夏と同じ部屋にいた。  
2人ともすでに私服に着替えている。  
もう夕飯は食べ終わっている。  
2人は静かにお茶をすすつた。

「お、翔。お前お茶入れるの上手だな  
「ありがとうございます」

一夏に言われて翔はお礼を言った。  
だが、一夏はひとつ思ったことはあった。  
あれから翔とはいろんなところを案内してたくさんお礼を言われた。  
だが、翔は決して笑顔を向けなかつた。

(なんか、今回の転校生も結構癖があるやつかもな)

同じ時間、篠、セリシア、鈴、シャルロット、ラウラたちはみなシヤルロットとラウラの部屋に集まっていた。  
この集まつは、翔のことに関係している。

「で、どうだつた？」

「なぜになにもしていなああなたが仕切るのですか？」

「私は違うクラスだからしじうがないでしょ」

「まあまあ二人とも」

ただの会話のはずだつたのに口喧嘩に発展しちゃうになりかけたとき、シャルロットが止めに入つた。

「しかし、実習の時もそつだつたが別に怪しいところは少なかつたぞ」

篠が本題を話すために口を開いた。  
隣でラウラもうなづく。

「しかし、顔は女みたいだつたよね」

「だが、一夏に聞いたところ、着替えは一緒に着替えていたりしきど。普通に会話もできているらしー」

ラウラが思い出しながら言つた。

だが、鈴はその言葉に少し疑問に思つた。

「あんた。よく聞けたわね」

「うん？なんか悪いのか」

「一夏さんの性格が違つたら感づづかれていたかもいませんでしたのに」

「ラウラの行動にセルシアはため息を吐きながらつぶやいた。

「だけど、本当に僕みたいに女の子なのかな？」

シャルロットが改めて言った。

そう。この作戦会議は翔は実はまた女性ではないかのことだった。シャルロットの件のことでの4人はさりに怪しんでいる。

「あんたが言うと説得力がないわね。完全に男子になりきっていたくせに」

「そ、そんなあ～」

鈴の一言でシャルロットはショウンとする。  
だが、4人は気にしないで会話を続ける。

「とにかく、わが嫁をまもるために何とか事件が起こる前に何とかしないとな」

「あなたの嫁じゃないけどね。それには同感だわ」

ラウラの言葉に少し不服だが鈴は同感したみたいだ。

「私もこれ以上は被害を出したくないですわ」

「ほう。その言葉にはいろんな意味が含まれているみたいに見えるぞ」

セルシアの言葉に鈴がにらみながら言つ。

「僕は、いつたいどうしたらいいのだろう」

一人、シャルロットだけ違うことを気にしていた。

男であつてほしいのか、女であつてほしいのかわからなかつた。

「とにかく、一番高率な方法を考えるしかないな」  
「しかし、着替えが一緒にできている状況でさらに性別が確かめられる方法はあるのか？」

筆にそういうわれてみんなうで組しながら考え始めた。  
だが、もうすでに答えは出ていたはずだがその方法は一切使いたくなかった。

「やはり、お風呂ですかね」

セルシアが意を決して口を開いた。  
みんなその言葉に耳を傾ける。

「少々危険ですがそれしかないですよ」  
「「「「危険」」」

みんなセルシアの危険という言葉のみに反応した。  
それはみんなが口にしたくなかったことと一致している。

それはもし翔が女だつた場合だ。

「ビビビ、ビビよ」

頭が沸騰しそうなシャルロットが枕を抱きながら言った。  
いつたい何を想像したのか。

「だが、これが一番効率がいいだろ」  
「そうだな、もし一夏が手を出したとき」  
「私たちで殺せばいいのだから」

全員いつせいに顔が暗くなつた。  
だが、いまだにシャルロットのみが顔を赤くしていた。

次の日。

翔と一夏は朝食をとるために食堂に来ている。  
とりあえず2人は焼き魚の定食を頼んだ。

2人が朝食を食べているとき、篠、セシリ亞、鈴、シャルロット、ラウラが近くの席に来た。

「お、おはよう」

「……おはようございます」

一夏が挨拶した後、翔も静かに挨拶をした。  
その声はまるで昨日の同一人物は思えない。  
転向してきたときと同じテンションだ。

「つむ。 おはよう」

「おはようございます。 一夏さん。 相田さん」

「朝から仲がいいようね」

それぞれ朝食を持ちながら席に着いた。

「なんだよ鈴。 仲がよくって悪いのか?」

「べ、別にそんなんじゃ」

「ゆっくり眠れた? 一夏?」

鈴がしゃべっているとき、シャルロットが会話に入ってきた。  
もちろん、鈴は不愉快な顔をしている。

「一夏。 朝食の時は私を誘えといつていいだろ」

リカウラが腕組しながら囁つてへくる。

「もういわれても、翔のことがあるからな」

「ここはまだほかの生徒と話していなこじやないか?」

リカウラは翔を見ながらこいつ。

銳いリカウラの皿線を浴びても、翔はおへかることなへ朝食を食べ続ける。

何回かこいつを見たがまだ食べ続ける。

それは何も思っていないかのよつ。

「こいつ。 こい度胸してはいるな」

「なんで喧嘩腰なんだよ」

一夏があきれながらシッコム。

「しかし、ほかの生徒とは本当に話さないな。何でだ?」

「その、まだこの学園にきて手間取つているみたいな感じで」

一夏が聞いたり翔はそう答える。

「もうなのか」

「一夏はそんなことはなかつたな。普通に女子と話していたが」

竜はこやみを囁つてへくる。

「なんでそんなこいやな風に囁つただよ。しかも普通じやねえよ。 緊張していたよ」

一夏は訂正しながら言つ。

だが、筈の言葉を聴いてほかの4人は一夏をにらんだ。

「だから違つて」

にらんでくる4人プラス一に対してさらに訂正する。

「一夏。僕もう食べ終わりましたけど」

「えー？ マジで！？」

さつきからこの6人が会話をしているとき翔はパクパク朝食を食べていた。

もちろん一夏は食事はほとんど進んでいない。そんな翔を見て一夏は一気に食事を流し込む。

「いや、そんなに急がなくとも大丈夫ですよ。僕はお茶でも飲んでいますし」

「お、おお。そうか。！」

そんな時、一夏が一気に顔が真っ青になつた。

これはもしかしなくつてものどに魚の骨が刺さつたらしい。

「あ、一夏。お茶です」

「す、すまねえ」

一夏は翔に差し出されたお茶をのんだ。

「ハア。ありがとな翔」

「いいえ。ビックリしました。さつきも言いましたが食事はゆつくりとつてください」

「お、おお

翔にそう言われて一夏は改めて食事を食べる。  
その光景を見ていた5人はお互い見合つた。  
完全に田で会話していた。

今日の時間は普通授業の時間だ。

翔は日本人ということなので普通に日本のクラスで勉強していた。  
今は数学の時間だ。

「では、この問題を相田。解いてみる」  
「は、はい」

千冬に言われて相田は席を立つ。  
問題は結構難しいものである。  
みんな頭を抱えている。

「　です」

だが、その問題をすぐに翔は解いてしまった。  
周りのみんなは驚いていた。

「……。では相田。これも解いてみる」

千冬はそういうながら即興に問題を作った。  
だが、その問題も表情一つ変えずにあっさり答えた。

その後、普通に授業は終わった。

「す」)いね。相田君。あの問題結構難しかったのに

「あ、ありがとう」)やっこまく

「お前、頭いいんだな」

女子生徒の言葉を返した後、一夏が翔の席に来て言つてきた。

「じゃあ、これも解いてみてよ」

翔の席に布仏本音のほとけほんねが言つてきた。

一夏はのほほんさんと呼んでいるらしく。

「6161826197 × 7544157145は?  
「46485785130345727565です」  
.....。

一瞬。一瞬だつた。

翔の口からはなぞの呪文みたいな数字を言つてきた。

「え、え」と

「お前、答えわかつていらないだろ」

「そ、そんなことないよ。じゃあ次は78778 × 94585は?」

再び本音は問題を出してきた。  
しかも結構難易度を下げてきた。

「7451217132です」

「あ、そうだよ!」

「違います。正確には7451217130です」

「へ？」

「やっぱおまえ答えわかっていなかつただろ」

本音の反応に一夏がツツコム。

翔は軽くため息は吐いた。

「も～。アイチの意地悪」

「なんですかその呼び方は？」

本音にそう呼ばれて翔は聞く。

本音はそれを聞かれて得意げな顔になる。

「ん？ 相田君に私がつけたあだ名だよ」

「被害者がまた一人か」

「被害者つてどういうこと？ おりむ～」

本音は一夏の腕に突つつく。

まるで子供だ。

「そういうえば、相田君はタッグマッチのとき、誰とペア組むの？」

そのとき、鷹月静穂たかつきしづねが翔の席に来て聞いてきた。

「そういうえば、僕はいまだにEJSの操縦があやふやなんですが」

翔もそのことをわかつていない。

タッグマッチのことはもう知らされてるので知っている。

ちなみに、教室のドアの小さな隙間から5人の少女たちがその光景を見ていた。

てか、 篇は別に隠れていなくともことと毎つのが。

後書き暴露コーナー。

翔「な、なんですか？このコーナーは？」

作者「後書きのコーナーです。僕とこの小説のキャラと一緒にこの小説の話をするコーナーです」

翔「と、言つことは暴露もあつとこつことですか？」

作者「ええ。ほかの小説がぎりぎりなのとこの小説をあげてこるとかですよ」

翔「すでに暴露しましたね」

2人「……」

2人（ボケがないと話が進まない！）

早くもダンマリですみません。

## 1・5 疑問と風呂場の少女たちの作戦

昼休み。

みんな集まつて昼食を食べていた。

翔はお昼に似合つているパンで一夏はラーメンを食べている。だが、なかなか2人の食事は進まなかつた。

理由は簡単だ。

隣の机の例の女子5人にものすゞく見られているからだ。

(お、俺。なんか怒らせる)としたか?)

(な、なんでこいつらを睨んでいるのでしょうか)

そんなこと考えていたせいで食事が終わるのに時間がギリギリになつてしまつた。

教室に戻るときもわかりやすい尾行でついてきている。

「あのな～お前らさつきからなんだんだ?」

我慢ができなくなつた一夏は後ろを向いて聞く。後ろの人影はわかりやすくビクンとなつていた。

「な、なんでもないわよ」

「そ、そうだ。なんでもない」

「そうですね。同じクラスなんですし」

「決して尾行していたわけじゃないからね」

……。

シャルロットの一言によつ全員黙りだした。

完全にいまのシャルロットの一言は尾行していましたと言っているみたいなものだ。

「あれ？ ボーデヴィッシュさんは？」

翔はまるで最初からラウラも一緒に尾行していたのをわかっているように言った。

「あれ？ あいつどこに言ったのよ？」

本当にわざわざまでラウラもそこにいたそうだったぶん、本気で一夏を尾行していたのだろう。見つかったときの隠れたかもさすがに知っているようだ。

「しかし、よくラウラもいたことを知っていたな。まあ、予想はできるけどな」

「まあ、それもそうですが、見えていましたから」「見えていた」

一夏は思つた。

確かにさつきまで見つかった4人はちらちら見えていたが、ラウラの姿は本当に見えていなかつた。

それなのに、翔は一夏よりも後ろを見ていないのでラウラの姿を見えていたといつている。

「あ、そろそろ時間です。急ぎましょ」

「お、おう」

そういつて全員急いで教室に向かつた。

今日の最後の授業は IIS の実習だ。

いつもと変わらず、一人一人 IIS に乗つていく。  
翔は相変わらず IIS の操作がうまくできていない。

「相田君と IIS の適正は結構低いですが、こんなに操る人が苦手な  
人はそうそういませんでしたね」

「す、すみません」

麻耶に言われて翔は少ししょんぼりする。  
相変わらず、翔は操るとき、早いのはいいがその分さらには操作がう  
まくできていないのだ。

「相田さんの場合、集中力が足りないのですか？」

そのとき、セシリアが話しかけてきた。

「それだったらこの銃を使って見せてよ」

近くにいたシャルロットがそういうながらハンドガンを渡した。  
翔は渡されたハンドガンを構えた。

「じゃあ、ここにターゲットに狙つて見せてよ」

そういつたと、翔の前にターゲットが出てきた。  
しかし、いま翔が乗つている機体は打鉄だ。  
銃を使う装備はまったくない。

つまり、一夏と同じ方法でこの銃を使うしかない。

「では、こきまわ」

翔はそういうてハンドガンの引き金を引いた。  
バンッと翔が持っていた銃先から大きな音が出た。

「ど、どうですか？」

「」、「これは」

翔が撃つた弾は見事にターゲットの真ん中に当たっていた。

「これは集中力はあるようだね」  
「そ、そのようですね」  
「だったら考えられる可能性はひとつだけだ」  
「あ、織斑先生」

千冬がそういうながらこっちに来た。  
どうやら千冬には翔がなかなかうまくEISが操作できない理由がわかつたようだ。

「もしかしたらお前がそのEISの適正が合っていないようだな」  
「て、適正ですか」  
「それってどういふことだ？」

一夏が千冬に聞いた。  
千冬はうなずきながら囁く。

「EISの「コアは本当にブラックボックスだ。それを考えればその可能性がものすごく強い。しかもEISが操縦できるのに今までそんなことが起じる」とは初めてだ。つまり、新たな可能性が生まれる」

千冬の言葉にみんな静かに聴いていた。

この日は特別に男子は大浴場を使うことが可能の日になつた。  
もちろん、こうなつたのは雛たちの仕業だ。  
ここから彼女たちの作戦が始まる。

「しかし、千冬姉の話を聞いていると、お前が工事をつけ操作ることは時間がかかりそうだな」

「気が重いです」

2人は着替えのあと、普通に風呂場に来た。  
相変わらず、この風呂場は広い。

しばらくお互い体やら洗つた。

そのあと、同時に湯船につかる。

一夏はあの時、シャルロットと一緒に風呂に入つたときのことを思い出して赤面する。

その顔をあるカメラが見届けていた。

「あんた。何したのよ」

「な、何で僕に来るの?」

その監視カメラの映像を見ている少女5人は一気にシャルロットを見つめる。

「しかし、今の様子だと別に女の部分は見せていないな」

さつきから普通に見ていたが確かにおかしいところはない。てか、この5人は完全なる覗きだということには気づいていないのか。

「しかし、相田がさつきからこっちを見ているぞ」

そう。実はさつきから翔の目線がこっちのカメラを見つめていたのだ。ちなみにこのカメラは天井の隠しカメラだ。

「ん？ どうした翔」

「あ、いえ。何でも」

翔はさつきの言つたが明らかに気にしていた。

「……」

結局、少女たちが思つたことはなにも起こらなかつた。だが、代わりの事件が起きた。

「さて、そろそろ上がるか」

そう言つて一夏は立ち上がつたとき、カメラ映像を見ていた少女たちは顔を一気に赤くした。

理由は、言つまでもなかつた。

第、セシリ亞、鈴がシャルロットとラウラの部屋から出たとき、その場に翔がいた。

「」ここにさすがに

翔は無表情で挨拶した。

「あんた。何よ」

「何つて。そうですね」

「用が無いならわたくしたちは自分たちの部屋に戻りますわ」

そう言って3人は自分の部屋に向かってあるく。

「まあ、一夏にはあの監視カメラは気づいていなかつたようですが」

その言葉に3人どけるが、さっきまでドアを開けてみていたシャルロットとラウラもビクッと体が動いた。

「まあ、ほひほひにしてくださいね。あれも立派な覗きなので」

そう言って翔は自分の部屋に向かって歩いた。

「な、なんでバレた?」

「の人。本当に只者ではありませんわね」

不思議な空気が少女たちを包みこんだ。

## 1・5 疑問と風呂場の少女たちの作戦（後書き）

後書き暴露「一ナ

一夏「今日は俺が担当だな」

作者「とは言つても暴露」となんてほんとござ起きませんが」

一夏「それじゃあただのトークコーナージャねえかよ」

作者「まあ、そのことは田も承知でしたよ」

一夏「大丈夫なのか?」の作者。来週からヒロインたちが来るの?」

作者「それって」

一夏「命が、あるといいな」

作者「!?」

翔が転向してから4日経った日曜日。珍しく翔は一人で校内を歩いていた。

しかし、彼の行動に変わったことはない。

大抵は一夏が一緒にいるので下手なことはできないのか。まだ翔を怪しんでいる篠、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラは尾行していた。

「あんた。その格好はなに?」

ラウラに向かって鈴が問う。

「何つて、外での尾行やお忍びの時はこの格好が常識だと聞いたぞ」

そうラウラはどうじから出てくるかわからない言葉を自身満々に言つた。

だが、格好は今の場所では怪しそう。

その格好とは完全に迷彩なのだ。

上から下までまるで軍人がきるような迷彩服だ。

まあ、確かにラウラは軍人だが、ドイツなのでその格好は変だ。

しかも場所は校内なのであります怪しい。

「だからやめようつていつたじゃんラウラ」

「だが、意外とこの服は動きやすい」

「あんたね~」

ラウラの言葉に全員あきれむ。

「いいから脱いでください。見つかりますよ」

「ここですか？」

「部屋でお願いします！！」

「つるさこぞセシリア！！」

「いや、筈の声も十分大きいよ」

「こんな」と言つて合つてこるのですぐ翔を見失ってしまった。  
筈たちはばらばらに探し出した。

ちなみにラウラは自分の部屋に戻った。

一 夏

翔がどこかに行つたので俺は一人校内を歩いていた。  
そういうえば今日は朝食以来筈たちを見てはいない。  
まあ、あいつらだつて代表候補生だから忙しいのは珍しくはない。

「あ、一夏……」

そのとき、俺はあるツインテールの少女に呼び止められた。  
だが、今の俺には行きたい場所がある。  
しかし、そのツインテールの少女は俺を逃がさないよつてこいつに  
向かつてダッシュしてきた。

「あんた。私が呼んでいるのだから止まりなさいよ」

そういうて鈴は俺の背中を蹴る。

「いてーなー！なにすんだよ」

「何つてさつき言つたとおりよバカ」

「知らねえよ。俺だつて行きたい場所はある

「ここから話をなれ。」

「お、いきなり縛りですか鈴さん。」

「こつは俺のセカンド幼馴染の鈴だ。髪型を見てのとおり活発すぎるほど活発だ。あと、貰（）よ。」

「なんか今変なこと考えてこたでしょ」

「な、なんでもないだ。」

「うわ。」の言葉は禁句だった。

「どうやら俺は思つたことば最近みんなにも云つて云つてこのよつた気がする。」

「いいから、少し付き合ことなさよ。」

「何でそつなの？」

「どうやら本氣で拒否権はないらしい。」

だが、俺はいま本氣で行きたい場所がある。

「いいから。いいから。」

なにがいいのかわからないうが、鈴は俺の右腕にいきなり飛びついてきた。

「動きづらうこと思つてないでしょうね」

大当たりの温泉旅行だ。

まあ、俺はそんなのは出す気はないが。

本気で当たられるトマジで怖い。

「早く行きましょ」

バン!!

鈴が俺の腕を引きずりながら歩き出したとき、いきなり簞が現れて竹刀で俺たちを叩こうとしてきた。  
それを見た鈴が真剣白刃取りでとる。  
てか、2人ともすげえ。

「なに邪魔しようとしてんのよ簞!!」

「なに、お前ならわかるだろ」

そつと2人とも一歩後ろに下がる。  
なんだ、いきなりこの展開は。  
しかし、俺は今すぐに行きたい場所があるので巻き込まれたくはないのでさつと離れる。

「あんたはここにいなさい!!」

「お前はここにこらー!!」

いきなりハモリながら俺を声で止めてくる2人。  
なんでこのときは「ンビネーションがいいのか本気でわからない。

「私だつて一夏に用がある」

「あんたね。あきらめなさい。もう私が予約したんだから」

俺は何かの商品ですか？

てか、どっち道、予約は受け付けてはいません!!

まじて早く俺を解放してくれ。

「あ、あなたたち。ここで何しているのですか？」

ここで最悪のシーンで来たらダメなやつが現れた。  
このせいで俺はますます解放してくれそうにもない。  
理由？

勘だ。今までの出来事で、この勘だけなら働く。  
なんか言つてこりもむなし。

「あなたたち。なに探さないで遊んでいるのですか？」

そう言つてセシリアがこっちに来る。

うわ～予想ここでもう戻たぬことがわかる。

「ここが一夏と一緒にどこか行こうとしていたんだ。セシリアも  
なにか言つてやれ

「あんたも奪い取らうとしたでしょ」

はて、俺はいつ鈴の所有物になつたのだろうか。記憶にない。  
しかし、そんなことでさらには会話はエスカレート。

だが、これはチャンスもある。

このまま俺はスルッとこの場から離れて目的の場所に行こう。

「あ、待て一夏！～」

「待ちなさいバカ！～」

「お待ちになつてください。話はまだ終わつてしませんよ

そう言つてくる3人だが、俺は無視して逃げる。

「あ、一夏、何しているの」

おう、違う道からシャルが現ってきた。  
ちなみに俺がシャルと呼んでいるのは親しみやすいからだ。  
だが、今はそんなことは関係ない。

普段落ち着いているシャルでも後方の3人を見れば同じ風になるだろう。

怒つたらある意味シャルが一番怖い。

「あ、一夏。待ってよ」

な、なぜだ。

なぜあの3人にも会っていないのに追いかけてくる。

「あ、一夏！！」

前方からラウラ少佐発見。  
て、なぜに校内で迷彩服を着る。  
何かの趣味なのか？

「おい、なぜに逃げる！？」  
「追いかけているからだ！？」

俺がそういうとラウラは後ろを向いて4人の姿を確認する。  
てか、シャルはいつの間に合流している！！  
完全に今の俺はいのししに追いかかれている感じである。  
だが、俺の目的地に行けばあの5人は入ってこれない。

「ちょっと待ちなさい一夏！！」

「まで一夏！！」

「お待ちになつてください

「一夏。まつてよ」

「ふむ。意味がよくわからんぞ

じゃあ追いかけてくるな！！

俺はそう思いながら目的地について駆け込む。

思つたとおり、5人は追いかけてこない。

それもそのはず、ここは男子トイレだからだ。

俺は自分の部屋から出た瞬間、鈴に話しかけられたからな。

もちろん5人は入つてこれない。

ん？待てよ。

俺、出てこれねえ。

後書き暴露「一ナ。

作者「どうも作者のくふくです」

第「どうも、ヒロインであるはずの篠ノ乃第だ」

作者「あの～第さん。なんか言葉にとげがあるのでか」

第「そう思つてもらつてもかまわない。この小説が始まつてから私はあの4人と一緒に行動することは多いが一夏と一緒に行動がまつたくない！！」

作者「ス、スマセン。多分、もうちょっと経つたらそういうと思います。多分」

第  
ガチャ

作者「なぜに真剣をとつだすのですか？大丈夫ですよ。一夏側のヒロインなのでそのシーンは必ずやります」

第「必ずだな」

作者「は、はい（汗）」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1028x/>

IS ~インフィニット・ストラトス~赤竜と白の騎士~reddragonawhiteknig

2011年10月10日00時53分発行